

新	旧
<p style="text-align: center;">障発第 0323002 号 平成 19 年 3 月 23 日</p> <p style="text-align: center;">一 部 改 正 障発第 0330014 号 平成 19 年 3 月 30 日 障発第 0331025 号 平成 20 年 3 月 31 日 障発第 0401008 号 平成 21 年 4 月 1 日 障発 1210 第 5 号 平成 22 年 12 月 10 日 障発 0928 第 1 号 平成 23 年 9 月 28 日 障発 0330 第 30 号 平成 24 年 3 月 30 日</p> <p>都道府県知事 各 指定都市市長 殿 中核市市長</p> <p style="text-align: center;">厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部長</p> <p style="text-align: center;">介護給付費等の <u>支給決定等</u> について</p> <p>標記については、障害者自立支援法（平成 17 年法律第 123 号。以下「法」という。）及びこれに基づく関係法令等によって規定しているところであるが、この実施に伴う取扱いを下記のとおり定め、平成 18 年 10 月 1 日より適用することとしたので、御了知の上、貴管内市町村、関係機関等に周知徹底を図るとともに、その運用に遺憾のないようにされたい。</p> <p>また、平成 15 年 3 月 28 日付け障発第 0328020 号当職通知「支援費支給決定について」、平成 15 年 6 月 6 日付け障発第 0606001 号当職通知「児童デイサービ</p>	<p style="text-align: center;">障発第 0323002 号 平成 19 年 3 月 23 日</p> <p style="text-align: center;">一 部 改 正 障発第 0330014 号 平成 19 年 3 月 30 日 障発第 0331025 号 平成 20 年 3 月 31 日 障発第 0401008 号 平成 21 年 4 月 1 日 障発 1210 第 5 号 平成 22 年 12 月 10 日 障発 0928 第 1 号 平成 23 年 9 月 28 日</p> <p>都道府県知事 各 指定都市市長 殿 中核市市長</p> <p style="text-align: center;">厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部長</p> <p style="text-align: center;">介護給付費等の <u>支給決定</u> について</p> <p>標記については、障害者自立支援法（平成 17 年法律第 123 号。以下「法」という。）及びこれに基づく関係法令等によって規定しているところであるが、この実施に伴う取扱いを下記のとおり定め、平成 18 年 10 月 1 日より適用することとしたので、御了知の上、貴管内市町村、関係機関等に周知徹底を図るとともに、その運用に遺憾のないようにされたい。</p> <p>また、平成 15 年 3 月 28 日付け障発第 0328020 号当職通知「支援費支給決定について」、平成 15 年 6 月 6 日付け障発第 0606001 号当職通知「児童デイサービ</p>

新	旧
<p>スに係る居宅生活支援費の支給等の対象となる児童について」及び平成 15 年 6 月 6 日付け障発第 0606002 号当職通知「児童福祉法第 21 条の 25 第 1 項に規定するやむを得ない事由による措置により児童デイサービスを提供する場合の留意事項について」は平成 18 年 9 月 30 日限り廃止する。</p>	<p>スに係る居宅生活支援費の支給等の対象となる児童について」及び平成 15 年 6 月 6 日付け障発第 0606002 号当職通知「児童福祉法第 21 条の 25 第 1 項に規定するやむを得ない事由による措置により児童デイサービスを提供する場合の留意事項について」は平成 18 年 9 月 30 日限り廃止する。<u>ただし、旧法施設支援に係る障害程度区分の決定については、なお従前の例によるものとする。</u></p>
<p>なお、本通知は、地方自治法（昭和 22 年法律第 67 号）第 245 条の 4 第 1 項の規定に基づく技術的な助言であることを申し添える。</p>	<p>なお、本通知は、地方自治法（昭和 22 年法律第 67 号）第 245 条の 4 第 1 項の規定に基づく技術的な助言であることを申し添える。</p>
<p style="text-align: center;">記</p>	<p style="text-align: center;">記</p>
<p>第一 支給決定 <u>及び地域相談支援給付決定</u> の基本的取扱い</p>	<p>第一 支給決定の基本的取扱い</p>
<p>障害福祉サービスの利用について介護給付費、特例介護給付費、訓練等給付費 <u>若しくは</u> 特例訓練等給付費（以下「介護給付費等」という。）の支給を受けようとする障害者又は障害児の保護者（以下「障害者等」という。） <u>又は地域相談支援給付費若しくは特例地域相談支援給付費</u>（以下「<u>地域相談支援給付費等</u>」という。）の支給を受けようとする障害者は、障害福祉サービス <u>又は地域相談支援</u> の種類ごとに市町村に対して支給申請を行う。</p>	<p>障害福祉サービスの利用について介護給付費、特例介護給付費、訓練等給付費 <u>又は</u> 特例訓練等給付費（以下「介護給付費等」という。）の支給を受けようとする障害者又は障害児の保護者（以下「障害者等」という。）は、障害福祉サービスの種類ごとに市町村に対して支給申請を行う。</p>
<p><u>市町村は、障害福祉サービスの支給決定（以下「支給決定」という。）又は地域相談支援の給付決定（以下「地域相談支援給付決定」という。）を行うに当たって、指定特定相談支援事業者が作成するサービス等利用計画案の提出を求める。</u></p>	
<p>市町村は、申請を行った障害者等の障害程度区分又は障害の種類及び程度、当該障害者等の介護を行う者の状況、<u>置かれている環境</u>、当該障害者等の介護給付費等の受給の状況その他の厚生労働省令で定める事項 <u>及びサービス等利用計画案</u> を勘案して、支給の要否を決定し、支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> を行う場合には、支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> の有効期間及び障害福祉サービス <u>又は地域相談支援</u> の種類ごとに月を単位として厚生労働省令で定める期間において介護給付費等を支給する障害福祉サービスの量（以下「支給量」という。） <u>又は地域相談支援給付費等を支給する地域相談支援の量（以下「地域相談支援給付量」という。）</u> を定めることとなる。</p>	<p>市町村は、申請を行った障害者等の障害程度区分又は障害の種類及び程度、当該障害者等の介護を行う者の状況、当該障害者等の介護給付費等の受給の状況その他の厚生労働省令で定める事項を勘案して、支給の要否を決定し、支給決定を行う場合には、支給決定の有効期間及び障害福祉サービスの種類ごとに月を単位として厚生労働省令で定める期間において介護給付費等を支給する障害福祉サービスの量（以下「支給量」という。）を定めることとなる。</p>
<p>第二 障害程度区分の認定 (略)</p>	<p>第二 障害程度区分の認定 (略)</p>
<p>1 対象となるサービスの種類</p>	<p>1 対象となるサービスの種類</p>

新	旧
<p>市町村は、障害者（児童福祉法（<u>昭和 22 年法律第 164 号</u>）<u>第 63 条の 2</u> 及び <u>第 63 条の 3</u> の規定に基づき 15 歳以上 18 歳未満の児童が障害者のみを対象とするサービスを利用する場合及び精神保健福祉センター等の意見に基づき精神障害者である児童が障害者のみを対象とするサービスを利用する場合を含む。以下同じ。）から介護給付費の支給対象となるサービスに係る支給申請があったときに、障害程度区分の認定を行う（同行援護サービスに係る支給申請のうち「身体介護を伴わない場合」は除く。）<u>。</u></p> <p>2 認定の有効期間 障害程度区分の認定の有効期間については、3 年を基本とし、障害者の心身の状況から状態が変動しやすいと考えられる場合等においては、市町村審査会の意見に基づいて 3 か月以上 3 年未満の範囲で有効期間を短縮できるものとする。</p> <p>3 認定の有効期間の開始日及び終了日 (1) 有効期間の開始日 障害程度区分の認定の有効期間の開始日は、原則として認定日とするが、支給決定の有効期間の開始日と合わせることも可能とする。 なお、障害程度区分を認定した結果、支給決定は却下となる場合においても、障害程度区分の認定自体は有効である。</p> <p>(2) (略)</p> <p>4 転出入時における障害程度区分認定の取扱い (略) (1) <u>事務手続</u> ①～③ (略) (2) (略)</p> <p>5 (略)</p>	<p>市町村は、障害者（児童福祉法 <u>第 63 条の 4</u> 及び <u>第 63 条の 5</u> の規定に基づき 15 歳以上 18 歳未満の児童が障害者のみを対象とするサービスを利用する場合及び精神保健福祉センター等の意見に基づき精神障害者である児童が障害者のみを対象とするサービスを利用する場合を含む。以下同じ。）から介護給付費の支給対象となるサービスに係る支給申請があったときに、障害程度区分の認定を行う。<u>。</u>（同行援護サービスに係る支給申請のうち「身体介護を伴わない場合」は除く。）</p> <p>2 認定の有効期間 障害程度区分の認定の有効期間については、3 年を基本とし、障害者の心身の状況から状態が変動しやすいと考えられる場合等においては、市町村審査会の意見に基づいて 3 か月以上 3 年未満の範囲で有効期間を短縮できるものとする。<u>ただし、平成 18 年 10 月 1 日から有効期間が開始するものについては、市町村における認定の更新時期を平準化できるように、3 か月から 3 年 6 か月の範囲で市町村が有効期間を事務的に割り振ることができることとする。</u></p> <p>3 認定の有効期間の開始日及び終了日 (1) 有効期間の開始日 障害程度区分の認定の有効期間の開始日は、原則として認定日とするが、支給決定の有効期間の開始日と合わせることも可能とする（<u>平成 18 年 10 月 1 日から支給決定の有効期間が開始する者に係る平成 18 年 10 月 1 日前の認定については平成 18 年 10 月 1 日とする。</u>）。 なお、障害程度区分を認定した結果、支給決定は却下となる場合においても、障害程度区分の認定自体は有効である。</p> <p>(2) (略)</p> <p>4 転出入時における障害程度区分認定の取扱い (略) (1) <u>事務手続</u> ①～③ (略) (2) (略)</p> <p>5 (略)</p>

新	旧
<p>第三 障害児に係る支給決定の方法</p> <p>(略)</p> <p>① 居宅介護 又は 短期入所の申請があった場合、障害の種類や程度の把握のために、5領域 10項目の調査(別表)を行った上で支給の要否及び支給量を決定する。</p> <p>居宅介護のうち障害児に係る通院等介助(身体介護を伴う場合)の対象者については、5領域 10項目の調査を行った上で、障害者に係る通院等介助(身体介護を伴う場合)の判断基準に準じ、日常生活において身体介護が必要な障害児であって、かつ、通院等介助のサービス提供時において、「歩行」「移乗」「移動」「排尿」「排便」について介助が必要と想定されるか否かによって、それぞれの実施主体が判断する。</p> <p>なお、短期入所については、障害児に係る厚生労働大臣が定める区分(平成 18 年厚生労働省告示第 572 号)による障害児程度区分に基づき支給の要否を決定することとしているが、具体的な適用方法は次のとおりとする。</p> <p>※障害児程度区分</p> <p>【区分 3】 別表①～④の項目のうち「全介助」が 3 項目以上又は別表⑤の項目のうち「ある」が 1 項目以上</p> <p>【区分 2】 別表①～④の項目のうち「全介助」若しくは「一部介助」が 3 項目以上又は別表⑤の項目のうち「ときどきある」が 1 項目以上</p> <p>【区分 1】 区分 3 又は区分 2 に該当しない児童で、別表①～④の項目のうち「一部介助」又は「全介助」が 1 項目以上</p> <p>② 行動援護の申請があった場合、障害者と同様、厚生労働大臣が定める基準(平成 18 年厚生労働省告示第 543 号。以下「基準告示」という。)に定める別表に掲げる 12 項目の調査等を行い、合計点数が 8 点以上の者を対象とする(てんかん発作については、必ずしも医師意見書の提出を求める必要はなく、家族等からの申出のみでも可とする。)</p> <p>③ 重度障害者等包括支援の申請があった場合、認定調査の調査項目と同様の 106 項目の調査を行い、市町村審査会に重度障害者等包括支援の対象とすることが適当であるか否かの意見を聴取した上で支給の要否を決定する。</p> <p>※ なお、対象児童に該当するか否かの判断に当たっては、必ずしも身体障害者手帳及び療育手帳の交付を受けている必要はない。</p>	<p>第三 障害児に係る支給決定の方法</p> <p>(略)</p> <p>① 居宅介護、児童デイサービス、短期入所の申請があった場合、障害の種類や程度の把握のために 5 領域 10 項目の調査(別表)を行った上で支給の要否及び支給量を決定する。</p> <p>居宅介護のうち障害児に係る通院等介助(身体介護を伴う場合)の対象者については、5 領域 10 項目の調査を行った上で、障害者に係る通院等介助(身体介護を伴う場合)の判断基準に準じ、日常生活において身体介護が必要な障害児であって、かつ、通院等介助のサービス提供時において、「歩行」「移乗」「移動」「排尿」「排便」について介助が必要と想定されるか否かによって、それぞれの実施主体が判断する。</p> <p>なお、短期入所については、障害児に係る厚生労働大臣が定める区分(平成 18 年厚生労働省告示第 572 号)による障害児程度区分に基づき支給の要否を決定することとしているが、具体的な適用方法は次のとおりとする。</p> <p>※障害児程度区分</p> <p>【区分 3】 別表①～④の項目のうち「全介助」が 3 項目以上又は別表⑤の項目のうち「ある」が 1 項目以上</p> <p>【区分 2】 別表①～④の項目のうち「全介助」若しくは「一部介助」が 3 項目以上又は別表⑤の項目のうち「ときどきある」が 1 項目以上</p> <p>【区分 1】 区分 3 又は区分 2 に該当しない児童で、別表①～④の項目のうち「一部介助」又は「全介助」が 1 項目以上</p> <p>② 行動援護の申請があった場合、障害者と同様、平成 18 年厚生労働省告示第 543 号に定める別表に掲げる 12 項目の調査等を行い、合計点数が 8 点以上の者を対象とする(てんかん発作については、必ずしも医師意見書の提出を求める必要はなく、家族等からの申出のみでも可とする。)</p> <p>③ 重度障害者等包括支援の申請があった場合、認定調査の調査項目と同様の 106 項目の調査を行い、市町村審査会に重度障害者等包括支援の対象とすることが適当であるか否かの意見を聴取した上で支給の要否を決定する。</p> <p>※ なお、対象児童に該当するか否かの判断に当たっては、必ずしも身体障害者手帳及び療育手帳の交付を受けている必要はない。</p> <p>また、児童デイサービスの支給決定に当たって、市町村は、当該児童が療育指導を必要とするか否かについて、児童相談所・保健所等に意見を求</p>

新	旧
<p>④ 同行援護の申請があった場合、障害者と同様、<u>基準告示</u>に定める別表第2に掲げる調査項目の項の各欄の区分に応じ、それぞれの調査項目に係る利用者の状況をそれぞれ同表の0点の項から2点の項までに当てはめて算出した点数のうち、移動障害の欄に係る点数が1点以上であり、かつ、移動障害以外の欄に係る点数のいずれかが1点以上であること。</p> <p>別表 障害児の調査項目（5領域10項目）（略）</p> <p>第四 支給決定<u>又は地域相談支援給付決定</u>の際勘案すべき事項その他の基本事項</p> <p>1 支給決定<u>及び地域相談支援給付決定</u>の際に勘案すべき事項を定める趣旨 障害者自立支援法施行規則（平成18年2月28日厚生労働省令第19号。以下「規則」という。）第12条に規定する支給決定の際に勘案すべき事項<u>及び規則第34条の35に規定する地域相談支援給付決定の際に勘案すべき事項</u>（以下「勘案事項」という。）を定める趣旨は、次のとおりである。</p> <p><u>（1）障害福祉サービス</u></p> <p>① 障害程度区分又は障害の種類及び程度その他の心身の状況 障害程度区分を認定することとされている障害者に対し、介護給付費の支給要否決定を行うに当たっては、申請者の障害程度区分が当該サービスの利用要件に該当しているか否かをまず確認する必要がある。また、障害程度区分が利用要件に該当しており、支給決定を行おうとする場合には、障害程度区分がサービスの必要性を示す障害者の心身の状態を段階的に区分していることにかんがみ、特に居宅介護等の訪問系サービスについては、その区分を勘案して支給量を定めることが適当である。</p> <p>また、訓練等給付費（特例訓練等給付費を含む。以下同じ。）の対象となる障害福祉サービスを利用しようとする障害者については、障害程度区分の認定は要さず、障害の種類及び程度を勘案する。その際、当該障害者等の身体障害者手帳や療育手帳等に記載されている障害の状況のみに着目するのではなく、障害があるがゆえに日常生活を営むのに支障をきたしている状況等を含めて勘案する。具体的には、訓練等給付費の対象となる障害福祉サービスを利用しようとする障害者については、認定調査の調査項目に係る調査をもって障害の程度を含めた心身の状況を把握するとともに、地域におけるサービス資源に限りがあり、利用</p>	<p><u>めることが望ましいものとする。</u></p> <p>④ 同行援護の申請があった場合、障害者と同様、<u>平成十八年厚生労働省告示第五百四十三号</u>に定める別表<u>第一</u>に掲げる調査項目の項の各欄の区分に応じ、それぞれの調査項目に係る利用者の状況をそれぞれ同表の0点の項から2点の項までに当てはめて算出した点数のうち、移動障害の欄に係る点数が1点以上であり、かつ、移動障害以外の欄に係る点数のいずれかが1点以上であること。</p> <p>別表 障害児の調査項目（5領域10項目）（略）</p> <p>第四 支給決定の際勘案すべき事項その他の基本事項</p> <p>1 支給決定の際に勘案すべき事項を定める趣旨 障害者自立支援法施行規則（平成18年2月28日厚生労働省令第19号。以下「規則」という。）第12条に規定する支給決定の際に勘案すべき事項（以下「勘案事項」という。）を定める趣旨は、次のとおりである。</p> <p><u>（1）障害程度区分又は障害の種類及び程度その他の心身の状況</u> 障害程度区分を認定することとされている障害者に対し、介護給付費の支給要否決定を行うに当たっては、申請者の障害程度区分が当該サービスの利用要件に該当しているか否かをまず確認する必要がある。また、障害程度区分が利用要件に該当しており、支給決定を行おうとする場合には、障害程度区分がサービスの必要性を示す障害者の心身の状態を段階的に区分していることにかんがみ、特に居宅介護等の訪問系サービスについては、その区分を勘案して支給量を定めることが適当である。</p> <p>また、訓練等給付費（特例訓練等給付費を含む。以下同じ。）の対象となる障害福祉サービスを利用しようとする障害者については、障害程度区分の認定は要さず、障害の種類及び程度を勘案する。その際、当該障害者等の身体障害者手帳や療育手帳等に記載されている障害の状況のみに着目するのではなく、障害があるがゆえに日常生活を営むのに支障をきたしている状況等を含めて勘案する。具体的には、訓練等給付費の対象となる障害福祉サービスを利用しようとする障害者については、認定調査の調査項目に係る調査をもって障害の程度を含めた心身の状況を把握するとともに、地域におけるサービス資源に限りがあり、利用希望者が定員枠を越えるような場合には、自立訓練（機能訓練・生活訓練）に限り、待機期間のほ</p>

新	旧
<p>希望者が定員枠を超えるような場合には、自立訓練（機能訓練・生活訓練）に限り、待機期間のほか、認定調査の調査項目のうち訓練等給付費に関連する項目の調査結果をスコア化し、暫定支給決定の優先順位を考慮する際の参考指標として用いるものとする。（障害児については第三を参照のこと。）</p> <p>なお、「その他の心身の状況」を勘案する場合とは、当該障害者が医療機関における入院治療が必要なために、障害福祉サービスで対処することが適当でない場合等を想定している。</p> <p>② （略）</p> <p>③ （略）</p> <p>④ （略）</p> <p>⑤ （略）</p> <p>⑥ （略）</p> <p><u>（２）地域相談支援</u></p> <p>① <u>障害の種類及び程度その他の心身の状況</u></p> <p><u>地域相談支援を利用しようとする障害者については、障害程度区分の認定は要さず、障害の種類及び程度を勘案する。その際、当該障害者の身体障害者手帳や療育手帳、精神保健福祉手帳等に記載されている障害の状況のみに着目するのではなく、障害があるがゆえに日常生活を営むのに支障をきたしている状況等を含めて勘案する。具体的には、訓練等給付費の対象となる障害福祉サービスを利用しようとする障害者と同様に、認定調査の調査項目に係る調査をもって障害の程度を含めた心身の状況を把握する。</u></p> <p>② <u>地域相談支援給付費等の受給状況及び地域相談支援給付費等以外の保健医療サービス又は福祉サービス等の利用状況</u></p> <p><u>市町村は、申請されたサービス以外のサービスの利用状況を踏まえ、地域相談支援給付費決定により当該障害者が全体としてどのようなサービスを受けながら生活することになるのかを把握した上で地域相談支援給付費決定を行う。</u></p> <p>③ <u>地域相談支援の利用に関する意向の具体的内容</u></p> <p><u>当該障害者が受けようとする地域相談支援の内容、利用目的等、具体的にどのような利用の意向があるのかを勘案して地域相談支援給付費決定を行う。特に、地域移行支援については、地域生活への移行に向けた意欲を含め、本人がどのような生活をしていきたいのかを十分考慮する必要がある。</u></p>	<p>か、認定調査の調査項目のうち訓練等給付費に関連する項目の調査結果をスコア化し、暫定支給決定の優先順位を考慮する際の参考指標として用いるものとする。<u>（旧法施設支援を利用しようとする障害者については従前の例による。また、障害児については第三を参照のこと。）</u></p> <p>なお、「その他の心身の状況」を勘案する場合とは、当該障害者が医療機関における入院治療が必要なために、障害福祉サービスで対処することが適当でない場合等を想定している。</p> <p><u>（２）</u> （略）</p> <p><u>（３）</u> （略）</p> <p><u>（４）</u> （略）</p> <p><u>（５）</u> （略）</p> <p><u>（６）</u> （略）</p> <p><u>（７）</u> （略）</p>

新	旧
<p><u>④ 置かれている環境</u> <u>地域移行支援に係る地域相談支援給付決定を行うに当たっては、当該障害者の入院又は入所している期間、家族関係や地域生活への移行後における生活環境（例えば、事業所・施設や医療機関までの距離や交通手段）等を勘案する。</u> <u>地域定着支援に係る地域相談支援給付決定を行うに当たっては、家族等の同居の有無、同居している家族等の年齢、心身の状況及び就労状況、同居している家族等による当該障害者への緊急時等において必要となる支援の見込み等を勘案して、地域相談支援給付決定をする。</u></p> <p><u>⑤ 当該申請に係る地域相談支援の提供体制の整備の状況</u> <u>地域相談支援給付決定を行うに当たっては、実際に当該障害者が当該地域相談支援を利用できる見込みがあることが必要であることから、障害福祉サービスと同様に本事項を勘案することとする。</u></p> <p>2 勘案事項の聴き取り・審査 勘案事項の聴き取りは、まず申請者本人から市町村の職員が行うことが原則となる。ただし、市町村は、認定調査の調査項目の聴き取りも含め、公正・中立な立場で業務を実施できるものと認められる<u>指定一般相談支援事業者、指定特定相談支援事業者等</u>に限り委託することができるものとする。また、本人からだけでは十分な聴き取りが困難である場合、本人の状態をよく知っている者（家族のほか、事業所・施設・<u>精神科病院</u>を利用している者については事業所・施設・<u>精神科病院</u>職員を含む。）からも聴き取りを行うなど、その適切な把握に努めることが必要である。</p> <p><u>3 サービス等利用計画案の提出</u> <u>市町村は、障害福祉サービスの申請若しくは変更の申請に係る障害者若しくは障害児の保護者又は地域相談支援の申請に係る障害者に対し、指定特定相談支援事業者が作成するサービス等利用計画案の提出を求める。ただし、当該申請者が、介護保険制度のサービスを利用する場合については、居宅サービス計画又は介護予防サービス計画（ケアプラン）の作成対象者となるため、障害福祉サービス固有のものと認められる行動援護、同行援護、自立訓練（生活訓練）、就労移行支援、就労継続支援等の利用を希望する場合であって、市町村がサービス等利用計画案の作成が必要と認める場合に求めるものとする。</u> <u>市町村からサービス等利用計画案の提出を求められた申請者は、指定特</u></p>	<p>2 勘案事項の聴き取り・審査 勘案事項の聴き取りは、まず申請者本人から市町村の職員が行うことが原則となる。ただし、市町村は、認定調査の調査項目の聴き取りも含め、公正・中立な立場で業務を実施できるものと認められる<u>指定相談支援事業者等</u>に限り委託することができるものとする。また、本人からだけでは十分な聴き取りが困難である場合、本人の状態をよく知っている者（家族のほか、事業所・施設を利用している者については事業所・施設職員を含む。）からも聴き取りを行うなど、その適切な把握に努めることが必要である。</p>

新	旧
<p><u>定相談支援事業者が作成したサービス等利用計画案を提出する。</u></p> <p><u>なお、市町村からサービス等利用計画案の提出を求められた申請者は、身近な地域に指定特定相談支援事業者がない場合又は指定特定相談支援事業者以外の者が作成するサービス等利用計画案の提出を希望する場合には、指定特定相談支援事業者が作成する計画案に代えて当該事業者以外の者が作成するサービス等利用計画案を提出できる。</u></p> <p><u>市町村は、これらのサービス等利用計画案の提出があった場合には、勘案事項及び当該サービス等利用計画案を勘案して支給決定又は地域相談支援給付決定を行う。</u></p> <p><u>なお、サービス等利用計画については、相談支援の提供体制を考慮する観点から、平成 24 年度から段階的に対象を拡大し、平成 27 年 3 月末までに原則としてすべての障害福祉サービス又は地域相談支援を利用する障害者等を対象とする取扱いとすることとしている。</u></p> <p>4 同時に支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u>ができるサービスの組み合わせ</p> <p>(1) <u>併給調整関係</u></p> <p>個々の障害者等のニーズや地域におけるサービス提供基盤は多様であること、さらに、利用実績払い(日額報酬)を導入したことに伴い、報酬の重複なく、様々なサービスを組み合わせることが可能となったことから、原則として、併給できないサービスの組み合わせは特定せず、報酬が重複しない利用形態であるならば、障害者等の自立を効果的に支援する観点から、市町村が支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u>時にその必要性について適切に判断し、特に必要と認める場合は併給を妨げないものとする。</p> <p>具体例を挙げると次のとおりである。</p> <p>① (略)</p> <p>② 障害者支援施設又はのぞみの園において施設入所支援を受ける障害者については、施設入所支援以外の日中活動に係る施設障害福祉サービスについては併せて支給決定を行うこととなるが、当該日中活動に係る施設障害福祉サービス以外の障害福祉サービス(居宅介護等)については、原則として利用することはできない。ただし、障害者支援施設又はのぞみの園に入所する者が一時帰宅する場合は、通常、受け入れ体制が確保されていることが想定されるが、市町村が特に必要と認める場合においては、施設入所に係る報酬が全く算定されない期間中に限り、居宅介護、重度訪問介護、同行援護 <u>及び</u> 行動援護について支給決定を行うことは可</p>	<p>3 同時に支給決定できるサービスの組み合わせ <u>(併給関係)</u></p> <p>個々の障害者等のニーズや地域におけるサービス提供基盤は多様であること、さらに、利用実績払い(日額報酬)を導入したことに伴い、報酬の重複なく、様々なサービスを組み合わせることが可能となったことから、原則として、併給できないサービスの組み合わせは特定せず、報酬が重複しない利用形態であるならば、障害者等の自立を効果的に支援する観点から、市町村が支給決定時にその必要性について適切に判断し、特に必要と認める場合は併給を妨げないものとする。</p> <p>具体例を挙げると次のとおりである。</p> <p>(1) (略)</p> <p>(2) 障害者支援施設又はのぞみの園において施設入所支援を受ける障害者については、施設入所支援以外の日中活動に係る施設障害福祉サービスについては併せて支給決定を行うこととなるが、当該日中活動に係る施設障害福祉サービス以外の障害福祉サービス(居宅介護等)については、原則として利用することはできない。<u>また、入所による旧法施設支援を受ける障害者については、原則として他の障害福祉サービスを利用することはできない。</u>ただし、障害者支援施設、のぞみの園 <u>若しくは旧法指定施設</u>に入所する者が一時帰宅する場合は、通常、受け入れ体制が確保されていることが想定されるが、市町村が特に必要と認める場合においては、施設入所に係</p>

新	旧
<p>能である。</p> <p>なお、障害者支援施設又はのぞみの園の入所者に係る日中活動サービスについては、既に、施設入所支援と併せて支給決定を受けていることから、改めて支給決定を受けることなく、一時帰宅中に当該日中活動サービスを利用することは可能である。</p> <p>また、障害者支援施設又はのぞみの園において施設入所支援を受ける者が、共同生活介護又は共同生活援助を体験的に利用する場合には、その間、共同生活介護若しくは共同生活援助の利用が可能となるとともに、併せてその期間中の日中活動サービスの利用も可能である。</p> <p>さらに、障害者支援施設又はのぞみの園において施設入所支援を受ける者は、地域移行支援における障害福祉サービスの体験的な利用支援及び体験的な宿泊支援の利用も可能である。</p> <p>③ 共同生活介護又は共同生活援助に係る共同生活を営む住居（以下③・④において「共同生活住居」という。）に入居する者（体験的な利用を行う者を含む。）は、入居中は、居宅介護及び重度訪問介護を利用することはできない（指定障害福祉サービス基準附則第18条の2第1項及び第2項の適用を受ける入居者、経過的居宅介護利用型指定共同生活介護事業所の入居者を除く。）。</p> <p>（以下（略））</p> <p>④ 障害者支援施設、のぞみの園又は共同生活住居に入所（入居）する者は、入所（入居）中は原則として短期入所を利用することはできない。ただし、入所（入居）者が、一時帰宅中において、短期入所が必要な事情が生じた場合には、通常、これらの入所施設又は共同生活住居に戻って必要な支援を受けることが想定されるが、一時帰宅中の施設入所支援等の報酬（帰宅時支援加算は含まない。）が算定されない期間においては、帰宅先における介護者の一時的な事情により必要な介護を受けることが困難で、かつ、帰宅先と入所施設又は共同生活住居とが遠隔地であるため直ちに入所施設又は共同生活住居に戻ることも困難である場合等、市町村が特に必要と認める場合は、支給決定を行うことは可能である。</p> <p>⑤ 日中活動サービスについては、その効果的な支援を図る観点から、通常、同一種類のサービスを継続して利用することが一般的であると考えられるが、障害者の効果的な支援を行う上で市町村が特に必要と認める場合に</p>	<p>る報酬が全く算定されない期間中に限り、居宅介護、重度訪問介護、同行援護、行動援護及び日中活動サービス（旧法指定施設の入所者に限る。）について支給決定を行うことは可能である。</p> <p>なお、障害者支援施設又はのぞみの園の入所者に係る日中活動サービスについては、既に、施設入所支援と併せて支給決定を受けていることから、改めて支給決定を受けることなく、一時帰宅中に当該日中活動サービスを利用することは可能である。</p> <p>また、障害者支援施設又はのぞみの園において施設入所支援を受ける者が、共同生活介護又は共同生活援助を体験的に利用する場合には、その間、共同生活介護若しくは共同生活援助の利用が可能となるとともに、併せてその期間中の日中活動サービスの利用も可能である。旧法指定施設に入所する者についても、共同生活介護又は共同生活援助の体験的な利用が可能であるが、日中に当該旧法指定施設に通所する場合にあっては、併せて旧法指定施設（通所）の利用に係る支給決定を受けるものとする。</p> <p>③ 共同生活介護又は共同生活援助に係る共同生活を営む住居（以下③・④において「共同生活住居」という。）に入居する者（体験的な利用を行う者を含む。）は、入居中は、居宅介護及び重度訪問介護を利用することはできない（指定障害福祉サービス基準附則第18条の2第1項及び第2項の適用を受ける入居者、経過的居宅介護利用型指定共同生活介護事業所の入居者を除く。）。</p> <p>（以下（略））</p> <p>④ 障害者支援施設、のぞみの園若しくは旧法指定施設又は共同生活住居に入所（入居）する者は、入所（入居）中は原則として短期入所を利用することはできない。ただし、入所（入居）者が、一時帰宅中において、短期入所が必要な事情が生じた場合には、通常、これらの入所施設又は共同生活住居に戻って必要な支援を受けることが想定されるが、一時帰宅中の施設入所支援等の報酬（帰宅時支援加算は含まない。）が算定されない期間においては、帰宅先における介護者の一時的な事情により必要な介護を受けることが困難で、かつ、帰宅先と入所施設又は共同生活住居とが遠隔地であるため直ちに入所施設又は共同生活住居に戻ることも困難である場合等、市町村が特に必要と認める場合は、支給決定を行うことは可能である。</p> <p>⑤ 日中活動サービスについては、その効果的な支援を図る観点から、通常、同一種類のサービスを継続して利用することが一般的であると考えられるが、障害者の効果的な支援を行う上で市町村が特に必要と認める</p>

新	旧
<p>は、新体系、旧体系を問わず、複数の日中活動サービスを組み合わせて支給決定を行うことは可能である。</p> <p>なお、複数の日中活動サービスの支給決定を受けている場合でも、日中活動サービスに係る報酬は一日単位で算定されることから、同一日に複数の日中活動サービスを利用することはできない(同一日に同一サービスを異なる事業所で利用した場合を含め、同一日においては、一の事業所以外は報酬を算定できない。)。ただし、市町村が日中活動サービスの利用と併せて宿泊型自立訓練が特に必要と認めた場合を除く。</p> <p>⑥ (略)</p> <p><u>(2) サービス等利用計画の導入と障害福祉サービスの利用の組み合わせについて</u></p> <p>① <u>基本的考え方</u></p> <p><u>平成24年4月以降、以下の利用の組み合わせについては、現行制度の基本的な考え方(職住分離や地域移行)は維持しつつ、指定特定相談支援事業者によるサービス等利用計画を作成する手続を経た上で、利用の組み合わせが必要な場合には、市町村の判断で認めることができることとする。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>就労継続支援B型と施設入所支援との利用の組み合わせ</u> ・ <u>生活介護と施設入所支援との利用の組み合わせ</u> <p>② <u>対象者</u></p> <p><u>平成24年4月以降、就労継続支援B型と施設入所支援との利用の組み合わせを希望する者又は生活介護と施設入所支援との利用の組み合わせを希望する者であって、障害程度区分が4(50歳以上の者は3)より低い者</u></p> <p><u>ア 法の施行時の身体・知的の旧法施設(通所施設も含む。)の利用者(特定旧法受給者)</u></p> <p><u>イ 法施行後に旧法施設に入所し、継続して入所している者</u></p> <p><u>ウ 平成24年4月の改正児童福祉法の施行の際に障害児施設(指定医療機関を含む)に入所している者</u></p> <p><u>エ 新規の入所希望者</u></p> <p><u>なお、エの者に係る生活介護と施設入所支援との利用の組み合わせについては、これらのサービスがいずれも介護給付であることから、障害程度区分1以上の者を対象とする。なお、通所による生活介護の利用要件(障害程度区分3(50歳以上の者は2)以上)は変更しないことに留意すること。</u></p>	<p>場合には、新体系、旧体系を問わず、複数の日中活動サービスを組み合わせて支給決定を行うことは可能である。</p> <p>なお、複数の日中活動サービスの支給決定を受けている場合でも、日中活動サービスに係る報酬は一日単位で算定されることから、同一日に複数の日中活動サービスを利用することはできない(同一日に同一サービスを異なる事業所で利用した場合を含め、同一日においては、一の事業所以外は報酬を算定できない。)。ただし、市町村が日中活動サービスの利用と併せて宿泊型自立訓練が特に必要と認めた場合を除く。</p> <p><u>(6) (略)</u></p> <p><u>(7) 旧知的障害者通勤寮入所者が利用する日中活動サービスについては、特に制限されない。</u></p>

新	旧
<p>③ <u>組み合わせを認める手続</u></p> <p><u>市町村は、本人の意向を踏まえ、以下の判断の視点及び手続を踏まえて判断するものとする。なお、支給決定の更新の際も同様とする。</u></p> <p><u>ア 判断の視点</u></p> <p><u>(ア) 生活介護と施設入所支援との組み合わせ</u></p> <p><u>地域における障害福祉サービスの提供体制の状況その他やむを得ない事情により、通所によって介護等を受けることが困難なもの</u></p> <p><u>(イ) 就労継続支援B型と施設入所支援の組み合わせ</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <u>・ 入所させながら訓練等を実施することが必要かつ効果的であると認められるもの</u> <u>・ 地域における障害福祉サービスの提供体制の状況その他やむを得ない事情により、通所によって訓練等を受けることが困難なもの</u> <p><u>イ 手続</u></p> <p><u>(ア) 市町村における全体方針の検討</u></p> <p><u>市町村の自立支援協議会において、地域における障害福祉サービスの提供体制等を踏まえた上で、当該市町村における施設入所支援と生活介護（障害程度区分4（50歳以上の者は3）より低い者）又は就労継続支援B型の利用の組み合わせに対する対応方針等について定めるとともに、市町村の自立支援協議会に一定期間ごとに本組み合わせの対象者の数や状況報告を行い、地域の社会資源の開発等につなげるよう努めることが望ましい。</u></p> <p><u>なお、地域において必要なサービスが提供できる等の理由により、仮に新規入所者の利用の組み合わせを原則として認めない場合であっても、旧法施設入所者等（②のアからウまで）については、引き続き、施設入所支援との組み合わせを可能とする。</u></p> <p><u>(イ) 個別の利用者に関する手続</u></p> <p><u>市町村は、支給決定に当たっては、指定特定相談支援事業者が上記の判断の視点等を踏まえて当該組み合わせが適当であるか否かを検討して作成したサービス等利用計画案を勘案して、当該組み合わせが適当であると認める場合に支給決定を行う。</u></p> <p><u>市町村は、当該支給決定に当たって、必要に応じて市町村審査会に諮ることが望ましい。</u></p> <p><u>なお、支給決定後において、指定特定相談支援事業者が、少なくとも年1回は、継続サービス利用支援（モニタリング）を実施し、組み合わせが適当であるか否かについて検討を行い、見直しが必要</u></p>	

新	旧
<p><u>な場合にはサービスの組み合わせの変更等に係る申請を利用者に勧奨するものとする。</u></p> <p><u>ウ 手続の適用時期</u> <u>(ア) 平成 24 年 3 月末時点での施設入所者 (②のアからウまで)</u> <u>当該者については、原則、支給決定の更新時にサービス等利用計画の作成を求めた上で、引き続き、当該組み合わせを認めて差し支えないこととする。</u> <u>なお、平成 24 年 4 月の改正児童福祉法の施行の際に障害児施設に入所している者 (②のウ) については、当該施行日においてはサービス等利用計画の作成を求めることを要しないが、支給決定の更新時においては、特に優先的にサービス等利用計画作成の対象とすること。</u> <u>(イ) 平成 24 年 4 月以降の新規利用者 (②のエ)</u> <u>上記手続を経たものに限り認めることとする。</u></p> <p>5 <u>支給決定基準等の作成</u> <u>(1) 障害福祉サービス</u> (略) <u>(2) 地域相談支援</u> <u>地域相談支援についても、介護給付費等の支給決定の場合と同様に、障害者の心身の状況や置かれている環境等の勘案事項を基礎に支給の要否等についてあらかじめ地域相談支援給付決定の基準を定めておくことが適当である。</u></p> <p>第五 <u>介護給付費等に係る支給決定及び地域相談支援給付決定</u></p> <p>1 介護給付費に係る支給決定 申請に係る障害福祉サービスについて介護給付費の支給決定をする場合は、申請者について認定した障害程度区分(障害児については障害の種類及び程度)等が、障害者自立支援法に基づく指定障害福祉サービス等及び基準該当障害福祉サービスに要する費用の額の算定に関する基準別表介護給付費等単位数表(平成 18 年厚生労働省告示第 523 号。以下「報酬告示」という。)の規定に基づき、当該障害福祉サービスの所定単位数が算定される場合(解釈運用に当たっては、平成 18 年 10 月 31 日障発第 1031001 号当職通知「障害者自立支援法に基づく指定障害福祉サービス等及び基準該当障害福</p>	<p>5 <u>支給決定基準</u>の作成 (略)</p> <p>第五 介護給付費等に係る支給決定</p> <p>1 介護給付費に係る支給決定 申請に係る障害福祉サービス(<u>旧法施設支援を除く。</u>)について介護給付費の支給決定をする場合は、申請者について認定した障害程度区分(障害児については障害の種類及び程度)等が、障害者自立支援法に基づく指定障害福祉サービス等及び基準該当障害福祉サービスに要する費用の額の算定に関する基準別表介護給付費等単位数表(平成 18 年厚生労働省告示第 523 号。以下「報酬告示」という。)の規定に基づき、当該障害福祉サービスの所定</p>

新	旧
<p>祉サービスに要する費用の額の算定に関する基準等の制定に伴う実施上の留意事項について」(以下「報酬解釈通知」という。)に定める各障害福祉サービスの対象者を参照すること。)に該当することを確認するとともに、申請者に係るその他の勘案事項 <u>及びサービス等利用計画案</u>を十分に踏まえること。また、その際には、必要に応じて法第 22 条第 2 項の規定に基づき市町村審査会、身体障害者更生相談所等の意見を聴くものとする。</p> <p>2 訓練等給付費に係る支給決定 (略)</p> <p>(1) 暫定支給決定の対象サービス 市町村は、障害者から自立訓練(機能訓練、生活訓練、宿泊型自立訓練)、就労移行支援又は就労継続支援 A 型(雇用契約を締結しない場合を含む。)の支給申請があったときは、<u>勘案事項やサービス等利用計画案を踏まえて</u>暫定支給決定を行うものとする。 就労継続支援 B 型については、年齢や体力の面で一般企業に雇用されることが困難となった者等であり、他事業への転換が困難な者であることから、暫定支給決定を要しないものとするが、報酬解釈通知に定める当該サービスの対象者に留意の上、一般就労又は就労移行支援若しくは就労継続支援 A 型の利用が可能な者に対し、安易に就労継続支援 B 型の支給決定を行うことがないよう留意されたい。</p> <p>なお、暫定支給決定の対象サービスに係る支給申請のあった障害者について、既に暫定支給決定期間中に行うアセスメントと同等と認められるアセスメントが行われており、改めて暫定支給決定によるアセスメントを要しないものと市町村が認めるときは、暫定支給決定は行わなくても差し支えないものとする。</p> <p>(2) 暫定支給決定期間 (略)</p> <p>(3) 暫定支給決定時における市町村、<u>サービス提供事業者及び指定特定相談</u></p>	<p>単位数が算定される場合(解釈運用に当たっては、平成 18 年 10 月 31 日障発第 1031001 号当職通知「障害者自立支援法に基づく指定障害福祉サービス等及び基準該当障害福祉サービスに要する費用の額の算定に関する基準等の制定に伴う実施上の留意事項について」(以下「報酬解釈通知」という。)に定める各障害福祉サービスの対象者を参照すること。)に該当することを確認するとともに、申請者に係るその他の勘案事項を十分に踏まえること。また、その際には、必要に応じて法第 22 条第 2 項の規定に基づき市町村審査会、身体障害者更生相談所等の意見を聴くものとする。</p> <p>2 訓練等給付費に係る支給決定 (略)</p> <p>(1) 暫定支給決定の対象サービス 市町村は、障害者から自立訓練(機能訓練、生活訓練、宿泊型自立訓練)、就労移行支援又は就労継続支援 A 型(雇用契約を締結しない場合を含む。)の支給申請があったときは、暫定支給決定を行うものとする。 就労継続支援 B 型については、年齢や体力の面で一般企業に雇用されることが困難となった者等であり、他事業への転換が困難な者であることから、暫定支給決定を要しないものとするが、報酬解釈通知に定める当該サービスの対象者に留意の上、一般就労又は就労移行支援若しくは就労継続支援 A 型の利用が可能な者に対し、安易に就労継続支援 B 型の支給決定を行うことがないよう留意されたい。 <u>また、法附則第 22 条第 1 項に規定する特定旧法受給者については、支給申請のあった訓練等給付費に係る障害福祉サービスについて、支給要件に該当しない場合でも、同条第 3 項の規定による経過措置により、平成 23 年度末までの間に限り訓練等給付費の支給を行うこととなるため、暫定支給決定を要しないものとする。</u></p> <p>なお、暫定支給決定の対象サービスに係る支給申請のあった障害者について、既に暫定支給決定期間中に行うアセスメントと同等と認められるアセスメントが行われており、改めて暫定支給決定によるアセスメントを要しないものと市町村が認めるときは、暫定支給決定は行わなくても差し支えないものとする。</p> <p>(2) 暫定支給決定期間 (略)</p> <p>(3) 暫定支給決定時における市町村 <u>及び事業者</u>の対応</p>

新	旧
<p>支援事業者の対応</p> <p>市町村は、暫定支給決定をした場合には、<u>サービス提供</u>事業者と連携調整の上、次の手順により、当該支給決定障害者のサービス利用の継続に対する適否等を適切に判断するものとする。</p> <p>① <u>サービス提供</u>事業者は、暫定支給決定を受けた利用者と利用契約をしたときは、利用者のアセスメントを通じて、暫定支給決定期間に係る適切な個別支援計画を作成し、当該計画に基づき支援を実施する。</p> <p>その際、利用者の障害特性、適性等を十分に踏まえた個別支援計画の作成が可能となるよう、利用者の家族や関係機関と十分連携すること。</p> <p>② <u>サービス提供</u>事業者は、暫定支給決定期間内に実施した利用者のアセスメント内容並びに個別支援計画、当該計画に基づく支援実績及びその評価結果をとりまとめ、市町村が定める日までに市町村<u>及び当該利用者に指定計画相談支援を提供する指定特定相談支援事業者</u>に提出する。</p> <p>③ 暫定支給決定期間経過後、利用者が引き続きサービスの継続を希望する場合、市町村は、<u>サービス提供</u>事業者から提出のあった②の書類や<u>当該指定特定相談支援事業者のモニタリング結果を踏まえ</u>（必要に応じて聴き取りを行う。）、サービスを継続することによる改善（維持を含む。以下同じ。）効果が見込まれるか否かを判断し、改善効果が見込まれないと判断した場合には、市町村、<u>サービス提供</u>事業者、<u>当該指定特定相談支援事業者</u>及び利用者（必要に応じて家族や関係機関等関係者の参加を求める。）による連絡調整会議を開催し、利用者とその旨を説明するとともに、今後のサービス利用について調整を行う。</p> <p>④ ③において市町村がサービスを継続することによる改善効果が見込まれると判断した場合は、個別支援計画に基づく本来的な訓練に移行する。</p> <p><u>なお、市町村は、当該判断に基づく支給決定を行うに当たっては、改めて指定特定相談支援事業者が作成するサービス等利用計画案の提出を求める必要はない。</u></p> <p>⑤ （略）</p> <p>3 地域相談支援給付決定</p> <p><u>申請に係る地域相談支援給付決定をする場合の留意事項は、以下の点に留意するほか、申請者に係るその他の勘案事項及びサービス等利用計画案を十分に踏まえること。また、その際には、必要に応じて法第51条の7第2項の規定に基づき市町村審査会、身体障害者更生相談所等の意見を聴くものとする。</u></p>	<p>市町村は、暫定支給決定をした場合には、事業者と連携調整の上、次の手順により、当該支給決定障害者のサービス利用の継続に対する適否等を適切に判断するものとする。</p> <p>① 事業者は、暫定支給決定を受けた利用者と利用契約をしたときは、利用者のアセスメントを通じて、暫定支給決定期間に係る適切な個別支援計画を作成し、当該計画に基づき支援を実施する。</p> <p>その際、利用者の障害特性、適性等を十分に踏まえた個別支援計画の作成が可能となるよう、利用者の家族や関係機関と十分連携すること。</p> <p>② 事業者は、暫定支給決定期間内に実施した利用者のアセスメント内容並びに個別支援計画、当該計画に基づく支援実績及びその評価結果をとりまとめ、市町村が定める日までに市町村に提出する。</p> <p>③ 暫定支給決定期間経過後、利用者が引き続きサービスの継続を希望する場合、市町村は、事業者から提出のあった②の書類に基づき（必要に応じて聴き取りを行う。）、サービスを継続することによる改善（維持を含む。以下同じ。）効果が見込まれるか否かを判断し、改善効果が見込まれないと判断した場合には、市町村、事業者及び利用者（必要に応じて家族や関係機関等関係者の参加を求める。）による連絡調整会議を開催し、利用者とその旨を説明するとともに、今後のサービス利用について調整を行う。</p> <p>④ ③において市町村がサービスを継続することによる改善効果が見込まれると判断した場合は、個別支援計画に基づく本来的な訓練に移行する。</p> <p>⑤ （略）</p> <p>3 法附則第21条第1項に基づく介護給付費の支給決定</p> <p><u>法附則第21条第1項の規定に基づき、旧法施設支援に係る介護給付費の支給決定をする場合は、障害程度区分の決定を含め、なお従前の例により行う。ただし、障害者自立支援法の施行に伴い、三障害共通のサービス提供体制の構築を図るため、従前の授産施設における相互利用制度を見直し、地域に必要な障害福祉サービスがない場合等の例外的な取扱いとして、障</u></p>

新	旧
<p><u>(1) 地域移行支援</u> <u>申請者が障害者支援施設、のぞみの園若しくは療養介護事業所に入所している障害者又は精神科病院に入院している精神障害者であることを確認する。</u> <u>なお、申請者が精神科病院に入院する精神障害者の場合については、長期に入院していることから地域移行に向けた支援の必要性が相対的に高いと見込まれる直近の入院期間が1年以上の者を中心に対象とすることとするが、直近の入院期間が1年未満である者であっても、例えば、措置入院者や医療保護入院者で住居の確保などの支援を必要とする者や、地域移行支援を行わなければ入院の長期化が見込まれる者についても対象となるので留意すること。</u></p> <p><u>(2) 地域定着支援</u> <u>① 居宅において単身であるため緊急時の支援が見込めない状況にある者</u> <u>② 居宅において家族と同居している障害者であっても、当該家族等が障害、疾病等のため、障害者に対し、当該家族等による緊急時の支援が見込めない状況にある者</u> <u>なお、障害者支援施設等や精神科病院から退所・退院した者の他、家族との同居から一人暮らしに移行した者や地域生活が不安定な者等も含む。</u></p>	<p><u>害者の障害種別と異なる種別の旧法指定施設(通所)の利用に係る介護給付費の支給決定を行う場合は次のとおりとするので、地域の実情に応じて適切に運用されたい。</u></p> <p><u>(1) 対象サービスの範囲</u> <u>旧法指定施設のうち次の通所施設とする。</u> <u>・旧指定特定身体障害者授産施設(通所部及び分場)</u> <u>・旧指定特定身体障害者通所授産施設(分場を含む。)</u> <u>・旧指定特定知的障害者入所授産施設(通所部及び分場)</u> <u>・旧指定特定知的障害者通所授産施設(分場を含む。)</u> <u>・旧指定身体障害者更生施設(通所部)</u> <u>・旧指定身体障害者療護施設(通所部)</u> <u>・旧指定知的障害者入所更生施設(通所部及び分場)</u> <u>・旧指定知的障害者通所更生施設(分場を含む。)</u></p> <p><u>(2) 支給決定の方法</u> <u>障害者の障害種別と異なる種別の旧法指定施設(通所)の利用に係る介護給付費の支給決定をしようとするときは、市町村は、次の方法により支給決定を行う。</u> <u>① 申請者(障害者)の障害種別と本来の支援内容に応じた障害程度区分(身体障害者及び知的障害者については従前の例による区分、精神障害者については区分なし。以下この項目において同じ。)を決定する。</u> <u>② 異なる障害種別に係る旧法指定施設(通所)の利用については、申請者にとって相応しいサービスを提供する事業所が地域内にない場合に認められる例外的な取扱いであることを踏まえ、市町村は、申請者が利用を希望する施設が実際に適したサービス提供を行えるか否かについて、設備構造や人員配置の体制等を確認の上判断し、適当と認めた場合には、利用する施設の種別に応じて、旧法施設支援の内容及び申請者に適用する報酬単価(区分)を決定する。</u> <u>なお、精神障害者については、授産施設の相互利用制度において保健所により行われていた「利用の決定」を市町村が実施するものであり、市町村は、必要に応じて保健所の指導・助言を得るものとする。</u></p> <p><u>(3) 報酬単価の適用方法</u> <u>① 本体報酬</u> <u>旧法指定施設を利用する場合の報酬単価については、利用する施設の種別(決定する旧法施設支援の内容)に応じて、利用者の障害種別及び障害程度区分に応じた報酬単価を適用する。</u></p>

新	旧
<p>第六 支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u>時に定める事項</p> <p>1 支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u>事項 市町村は、申請のあった障害福祉サービス <u>又は地域相談支援</u>の種類に応じ、申請者からの具体的な利用意向の聴き取り等により、更にサービス内容を特定して支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u>を行うとともに、特定された障害福祉サービス <u>又は地域相談支援</u>の種類（区分）及び内容ごとに支給量 <u>又は地域相談支援給付量</u>及び支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u>の有効期間を定める。</p> <p>(1) 支給量及び <u>地域相談支援給付量</u> 支給量 <u>及び地域相談支援給付量</u>を定める単位期間については、1か月とし、支給量を定める単位については、サービスの種類ごとに次の単位で定める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 居宅介護、重度訪問介護、同行援護、行動援護・・・時間（30分単位） <u>※ 家事援助において、最初の30分以降は15分を単位とする。</u> ・ 重度障害者等包括支援・・・単位／月 ・ 上記以外の障害福祉サービス <u>及び地域相談支援</u>・・・日／月 <p>また、具体的な支給量 <u>及び地域相談支援給付量</u>については、障害福祉サービス <u>及び地域相談支援</u>の種類ごとに、支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u>を行おうとする者の勘案事項を踏まえて、次の考え方により、適切な量を定めるものとする。</p> <p>なお、複数のサービスを組み合わせて支給決定 <u>又は地域相談支援給付決</u></p>	<p><u>② 適用される加算等</u> <u>入所時特別支援加算、退所時特別支援加算、重度重複障害者加算、栄養管理体制加算、食事提供体制加算、利用者負担上限額管理加算、定員超過利用減算、訪問支援特別加算等</u></p> <p><u>(4) 他障害者を受け入れる場合の利用者数の上限設定</u> <u>当該施設の利用定員内で他障害の者を受け入れるものとする。</u> <u>なお、受け入れる他障害の者の割合については、利用定員の2割を上限とする。ただし、従前より相互利用を行ってきた施設において利用定員の2割を超えて受け入れていた施設については、従前の利用者数の範囲内で他障害の者の受入れを可能とする。また、厚生労働大臣が定める離島その他の地域（平成18年厚生労働省告示第540号）であって、同一市町村内に同種のサービス提供が行われていない場合については、利用定員の5割を上限とする。</u></p> <p>第六 支給決定時に定める事項</p> <p>1 支給決定事項 市町村は、申請のあった障害福祉サービスの種類に応じ、申請者からの具体的な利用意向の聴き取り等により、更にサービス内容を特定して支給決定を行うとともに、特定された障害福祉サービスの種類（区分）及び内容ごとに支給量及び支給決定の有効期間を定める。</p> <p>(1) 支給量 支給量を定める単位期間については、1か月とし、支給量を定める単位については、サービスの種類ごとに次の単位で定める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 居宅介護、重度訪問介護、同行援護、行動援護…時間(30分単位)／月 ・ 重度障害者等包括支援…単位／月 ・ 上記以外の障害福祉サービス…日／月 <p>また、具体的な支給量については、障害福祉サービスの種類ごとに、支給決定を行おうとする者の勘案事項を踏まえて、次の考え方により、適切な量を定めるものとする。</p> <p>なお、複数のサービスを組み合わせて支給決定する場合（併給が認められないサービスを除く。）は、複数のサービスを合わせた支給量が適切な</p>

新	旧
<p><u>定</u>をする場合（併給が認められないサービスを除く。）は、複数のサービスを合わせた支給量が適切な量となるよう留意する必要がある。</p> <p>① （略）</p> <p>② （略）</p> <p>③ （略）</p> <p>④ 生活介護、自立訓練（機能訓練・生活訓練）、就労移行支援、就労継続支援</p> <p>ア 平成 18 年 4 月から利用実績払い（日額報酬）を導入したことに伴い、通所による指定施設支援の量について、原則として、各月の日数から 8 日を控除した日数（以下「原則の日数」という。）を限度として利用することを決定しているものとみなしてきたところであるが、平成 18 年 10 月以降の法移行後においても、日中活動サービスについては、引き続き、原則として一人の障害者が一月に利用できる日数（支給量）は、「原則の日数」を上限とすることを基本とする。ただし、次の場合には、「原則の日数」を超える支給量を定めることが可能なものとする。</p> <p>（ア）・（イ） （略）</p> <p>イ・ウ （略）</p> <p>⑤ 療養介護、共同生活介護、施設入所支援、宿泊型自立訓練、共同生活援助 <u>及び地域相談支援</u></p> <p>支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> の有効期間中における各月における暦日数を支給量 <u>又は地域相談支援給付量</u> として定める。ただし、共同生活介護及び共同生活援助において体験的な利用を行う場合、各月における暦日数を上限として、必要な日数を定めるものとする。</p> <p>（2）支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> の有効期間</p> <p>介護給付費等に係る支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> の有効期間は、障害程度区分や介護を行う者の状況等の支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> を行った際に勘案した事項が変化することがあるため、市町村が障害者等の状況を的確に把握し、提供されているサービスの適合性を確認するとともに、適切な障害程度区分や支給量に見直しを行うため、市町村が定めるものである。その決定に当たっては、支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> に際し勘案した状況がどの程度継続するかという観点から検討することとなるが、支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> の有効期間を定める趣旨からあまりに長い期間とすることは適切でないため、規則第 15 条 <u>及び第 34 条の 42</u> に規定する期間を超えてはならないこととしている。</p>	<p>量となるよう留意する必要がある。</p> <p>① （略）</p> <p>② （略）</p> <p>③ （略）</p> <p>④ 生活介護、<u>旧法施設支援（通所）</u>、自立訓練（機能訓練・生活訓練）、就労移行支援、就労継続支援</p> <p>ア 平成 18 年 4 月から利用実績払い（日額報酬）を導入したことに伴い、通所による指定施設支援の量について、原則として、各月の日数から 8 日を控除した日数（以下「原則の日数」という。）を限度として利用することを決定しているものとみなしてきたところであるが、平成 18 年 10 月以降の法移行後においても、<u>新体系の日中活動サービス及び旧法施設支援（通所）</u> については、引き続き、原則として一人の障害者が一月に利用できる日数（支給量）は、「原則の日数」を上限とすることを基本とする。ただし、次の場合には、「原則の日数」を超える支給量を定めることが可能なものとする。</p> <p>（ア）・（イ） （略）</p> <p>イ・ウ （略）</p> <p>⑤ 療養介護、共同生活介護、施設入所支援、<u>旧法施設支援（入所）</u>、宿泊型自立訓練、共同生活援助 <u>及び地域相談支援</u></p> <p>支給決定の有効期間中における各月における暦日数を支給量として定める。ただし、共同生活介護及び共同生活援助において体験的な利用を行う場合、各月における暦日数を上限として、必要な日数を定めるものとする。</p> <p>（2）支給決定の有効期間</p> <p>介護給付費等に係る支給決定の有効期間は、障害程度区分や介護を行う者の状況等の支給決定を行った際に勘案した事項が変化することがあるため、市町村が障害者等の状況を的確に把握し、提供されているサービスの適合性を確認するとともに、適切な障害程度区分や支給量に見直しを行うため、市町村が定めるものである。その決定に当たっては、支給決定に際し勘案した状況がどの程度継続するかという観点から検討することとなるが、支給決定の有効期間を定める趣旨からあまりに長い期間とすることは適切でないため、規則第 15 条及び第 34 条の 42 に規定する期間を超えてはならないこととしている。</p>

新	旧
<p>このため、支給決定期間 <u>又は地域相談支援給付決定期間</u>の終了に際しては、改めて介護給付費等の支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u>を受けることにより継続してサービスを受けることが可能である（ただし、自立訓練等期限の定めのある訓練等給付に係る障害福祉サービス等については第8の2を参照のこと。）。</p> <p>なお、規則第15条 <u>及び第34条の42</u>に規定する期間はあくまで上限であるから、支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u>に当たっては、個々の状況に応じて適切な期間とするよう留意されたい。</p> <p>2 支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u>に併せて決定等する事項</p> <p>市町村は、支給決定に際し、当該障害福祉サービスに係る報酬の算定上あらかじめ市町村において決定、確認等が必要な事項、利用者負担上限月額その他必要な事項について、併せて決定等を行い、障害福祉サービス受給者証に記載すること。</p> <p><u>市町村は、地域相談支援給付決定に際し、地域相談支援に係る報酬の算定上あらかじめ市町村において決定が必要な事項その他必要な事項について、併せて決定等を行い、地域相談支援受給者証に記載すること。</u></p> <p>なお、障害福祉サービス受給者証 <u>及び地域相談支援受給者証</u>については、規則第14条 <u>及び第34条の41</u>において記載事項を規定しているが、様式については、市町村がある程度柔軟に対応できるよう規則に規定しなかったものである。したがって、市町村において適切な様式を作成し、交付することとして差し支えないが、必要な内容が適切に記載されるとともに、支給決定障害者等から提示を受ける指定障害福祉サービス事業者等が容易に記載内容を確認できるようにする観点から、別に提示する様式例を参考とされたい。</p> <p>第七 支給決定の変更</p> <p>市町村は、変更の申請又は職権により、支給決定障害者等につき必要があると認めるときは、支給決定の有効期間内において支給量の変更を行うことができる。</p> <p>支給決定の変更には、次のことに留意すること。</p> <p><u>なお、運用上、地域相談支援給付決定の変更は想定されないことに留意すること。</u></p> <p>1 障害程度区分の変更認定</p>	<p>このため、支給決定期間の終了に際しては、改めて介護給付費等の支給決定を受けることにより継続してサービスを受けることが可能である（ただし、自立訓練等期限の定めのある訓練等給付に係る障害福祉サービス等については第8の2を参照のこと。）。</p> <p>なお、規則第15条及び第34条の42に規定する期間はあくまで上限であるから、支給決定又は地域相談支援給付決定に当たっては、個々の状況に応じて適切な期間とするよう留意されたい。</p> <p>2 支給決定に併せて決定等する事項</p> <p>市町村は、支給決定に際し、当該障害福祉サービスに係る報酬の算定上あらかじめ市町村において決定、確認等が必要な事項、利用者負担上限月額その他必要な事項について、併せて決定等を行い、障害福祉サービス受給者証に記載すること。</p> <p>なお、障害福祉サービス受給者証については、規則第14条において記載事項を規定しているが、様式については、市町村がある程度柔軟に対応できるよう規則に規定しなかったものである。したがって、市町村において適切な様式を作成し、交付することとして差し支えないが、必要な内容が適切に記載されるとともに、支給決定障害者等から提示を受ける指定障害福祉サービス事業者等が容易に記載内容を確認できるようにする観点から、別に提示する様式例を参考とされたい。</p> <p>第七 支給決定の変更</p> <p>市町村は、変更の申請又は職権により、支給決定障害者等につき必要があると認めるときは、支給決定の有効期間内において支給量の変更を行うことができる。</p> <p>支給決定の変更には、次のことに留意すること。</p> <p>1 障害程度区分の変更認定</p>

新	旧
<p>(略)</p> <p>2 変更の決定 (略)</p> <p>第八 支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> の更新</p> <p>支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> の有効期間が終了する場合において、支給決定障害者等が引き続き当該障害福祉サービス <u>又は地域相談支援</u> の利用を希望するときは、市町村は、支給決定障害者等からの支給申請に基づき、勘案事項等を勘案した結果、サービスの利用継続の必要性が認められれば、改めて支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> をすることができる(この支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> を以下「支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> の更新」という。)</p> <p>支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> の更新に当たっては、次のことに留意すること。</p> <p>1 障害程度区分との関係 (略)</p> <p>2 支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> の更新に係る利用期間の取扱い</p> <p>自立訓練等期限の定めがある訓練等給付費に係る障害福祉サービスなど、次に掲げる支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> の更新に際しては、標準利用期間を念頭に置くほか、利用継続の必要性について十分な評価検討を行う必要がある。</p> <p>なお、訓練等給付費の支給要否決定 <u>又は地域相談支援給付費の給付要否決定</u> を行う際の認定調査の調査項目に係る調査内容(参考指標としてのスコアを含む。)については、有効期間を特に設定していないが、障害程度区分との均衡を考慮して、最長3年間の範囲内で、支給決定 <u>又は地域相談支援給付決定</u> の更新に際し、障害者の心身の状況等に応じて適宜見直しをすることが考えられる。</p> <p>(1) <u>訓練等給付費等に係る障害福祉サービス等</u></p> <p>① (略)</p> <p>② 宿泊型自立訓練</p> <p>宿泊型自立訓練は、従前の制度における知的障害者通勤寮や精神障害者生活訓練施設等の機能を踏まえ、日中、一般就労や障害福祉サービス</p>	<p>(略)</p> <p>2 変更の決定 (略)</p> <p>第八 支給決定の更新</p> <p>支給決定の有効期間が終了する場合において、支給決定障害者等が引き続き当該障害福祉サービスの利用を希望するときは、市町村は、支給決定障害者等からの支給申請に基づき、勘案事項等を勘案した結果、サービスの利用継続の必要性が認められれば、改めて支給決定をすることができる(この支給決定を以下「支給決定の更新」という。)</p> <p>支給決定の更新に当たっては、次のことに留意すること。</p> <p>1 障害程度区分との関係 (略)</p> <p>2 支給決定の更新に係る利用期間の取扱い</p> <p>自立訓練等期限の定めがある訓練等給付費に係る障害福祉サービスなど、次に掲げる支給決定の更新に際しては、標準利用期間を念頭に置くほか、利用継続の必要性について十分な評価検討を行う必要がある。</p> <p>なお、訓練等給付費の支給要否決定を行う際の認定調査の調査項目に係る調査内容(参考指標としてのスコアを含む。)については、有効期間を特に設定していないが、障害程度区分との均衡を考慮して、最長3年間の範囲内で、支給決定の更新に際し、障害者の心身の状況等に応じて適宜見直しをすることが考えられる。</p> <p><u>(1)</u> (略)</p> <p><u>(2)</u> 宿泊型自立訓練</p> <p>宿泊型自立訓練は、従前の制度における知的障害者通勤寮や精神障害者生活訓練施設等の機能を踏まえ、日中、一般就労や障害福祉サービスを利</p>

新	旧
<p>を利用している者等を対象として、一定期間、夜間の居住の場を提供し、帰宅後に生活能力等の維持・向上のための訓練を行うとともに、地域移行に向けた関係機関との連絡調整等を行い、積極的な地域移行の促進を図るものとして類型化している。</p> <p>このため、標準利用期間は、原則2年間（<u>長期間入院していた又はこれに類する事由のある障害者</u>にあっては、3年間）とし、市町村は、サービスの利用開始から1年ごとに利用継続の必要性について確認し、支給決定の更新を行う。</p> <p><u>この場合の「長期間入院していた又はこれに類する事由のある障害者」とは、長期間、指定障害者支援施設等の入所施設に入所又は精神科病院等に入院していた者はもとより、長期間のひきこもり等により社会生活の経験が乏しいと認められる者や発達障害のある者など2年間の利用期間では十分な成果が得られないと認められる者等についても含むものとする。</u></p> <p>なお、<u>標準利用期間</u>を超える支給決定の更新を行おうとする場合には、市町村審査会の意見を聴くものとする。</p> <p>③ (略)</p> <p>④ (略)</p> <p>⑤ (略)</p> <p><u>(2) 地域相談支援</u></p> <p>① <u>地域移行支援</u></p> <p><u>地域移行支援は、長期にわたり漫然と支援を継続するのではなく、一定の期間の中で目標を立てた上で効果的に支援を行うことが望ましいサービスであるため、規則第34条の42第1項において給付決定期間を6ヶ月間までとしている。この期間では、十分な成果が得られず、かつ、引き続き地域移行支援を提供することによる地域生活への移行が具体的に見込まれる場合には、6ヶ月間の範囲内で給付決定期間の更新が可能である。</u></p> <p><u>なお、更なる更新については、市町村審査会の個別審査を経てその必要性を判断することが望ましい。</u></p> <p>② <u>地域定着支援</u></p> <p><u>地域定着支援は、規則第34条の42第2項において給付決定期間を1年間までとしている。</u></p> <p><u>対象者や同居する家族等の心身の状況や生活状況、緊急時支援の実績等を踏まえ、引き続き地域生活を継続していくための緊急時等の支援体</u></p>	<p>用している者等を対象として、一定期間、夜間の居住の場を提供し、帰宅後に生活能力等の維持・向上のための訓練を行うとともに、地域移行に向けた関係機関との連絡調整等を行い、積極的な地域移行の促進を図るものとして類型化している。</p> <p>このため、標準利用期間は、原則2年間とし、市町村は、サービスの利用開始から1年ごとに利用継続の必要性について確認し、支給決定の更新を行う。</p> <p>なお、サービスの利用開始から2年間を超える支給決定の更新を行おうとする場合には、市町村審査会の意見を聴くものとする。</p> <p><u>(3)</u> (略)</p> <p><u>(4)</u> (略)</p> <p><u>(5)</u> (略)</p>

新	旧
<u>制が必要と見込まれる場合には、1年間の範囲内で給付決定期間の更新が可能である（更なる更新についても、必要性が認められる場合には更新可）。</u>	